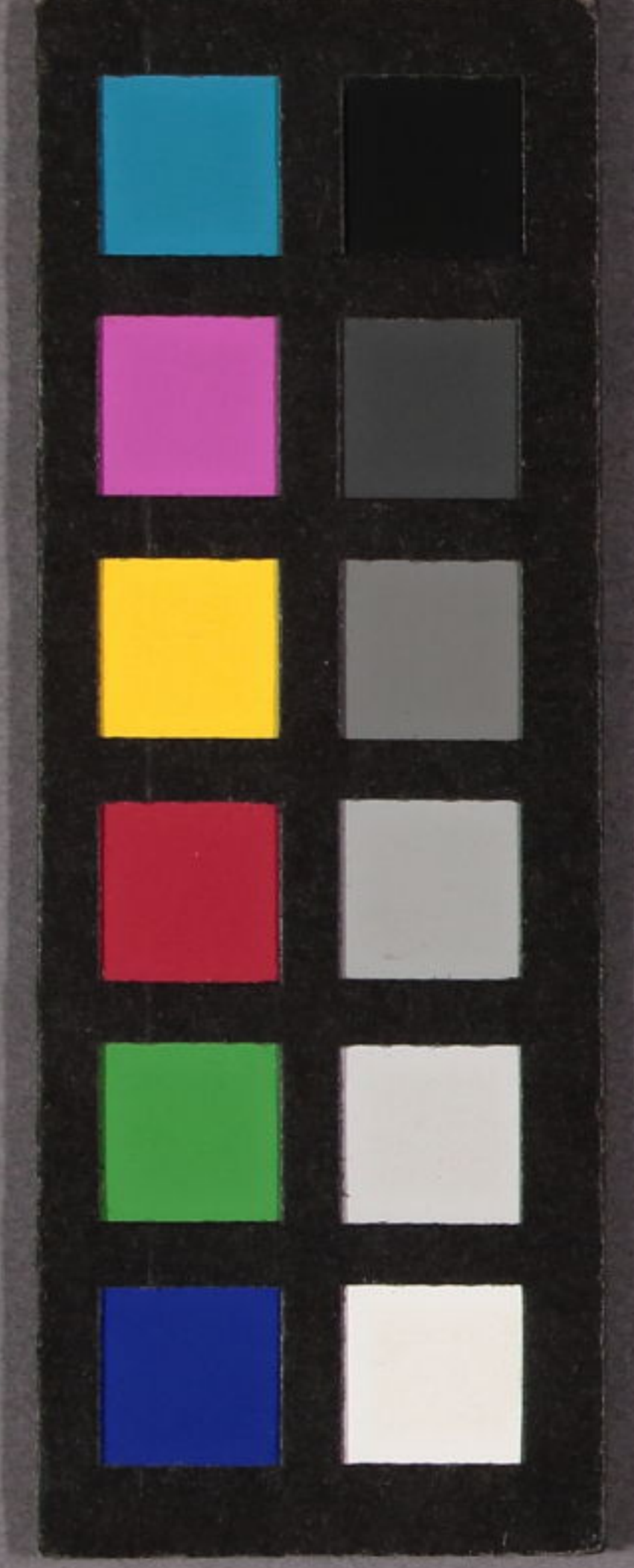


言水 太来 素堂 沾德 来山

芦陰舎大魯関

俳諧五子稿

浪速書肆

朝陽館

序

いふもくもかゝる世に我俳諧
我やもへきしをかくるも一伊
勢の神をよむは伊勢の神に
れひしをかくるも一伊勢の神
きよ長の時代はのちして移幸れ
鈴屋の神のちをかくるも一伊
拂園のちをかくるも一伊勢の神



晋子や精哉うへそく延を
四人よかきふーまねはあま
きこく天曆架臺の西人
あはくふ矢に後うー何の男
くまこひかていふはうに
物ねふーきれきそふさふ
人くき源英ふーまねはあま
くまねふたふー一

まふふかひありそれふ
たる臺のまの今ふたれ名
世ふふふふふふふふふ
世人の創世なるふふふ
ふふふふふふふふふ
ものもねくふふふふふ
ふふふふふふふふふ

あそし成きハ五子稿
のいけていふに海を曲る
か

安永甲午初秋

浪花 芦屋舎大魯送

俳諧五子稿

紫藤軒言水句集

浪華 芦屋舎大魯園

春之部

えりや春の春の細代
園固やといふささ水乃
遠乃春の春乃春誰を小
而新や春た右の春を相

初をやなむ以福の中れは處
るにや有る福深き無き無き
流解多門ハ解とありき
とむかひ赤人ハ解とありき
とむかひ紅山ハ解とありき
福壽第一寸との始り
人ハ解と解と解と解と解と
白魚のちりし振るる水ハ男

卯子卯貝酒多しハハハハハ

六十余歳亦化見

海をのりし越えぬるハ小島系

まきばハハハ

必はの羽神ハハハハハハハハハ

まきばハハハハハハハハハハハハハ

まきばハハハハハハハハハハハハハ

西ハハハハハハハハハハハハハハハ

高れ戸やあま草の中の花と
し玉に梅おろ小雪はか霜
熊月 月 月 月 梅
猫おと梅うこまうおぼる月

八百年の古く

梅ははるけ風あまこ自然

南禅禅者

砂ととハ意味はさつ 梅

ふりて

け月ふおきぬ毒は神結ふ

つとけし小き梅のさる

種かこるもやけつら雨を

湖上

破き種もるむ勢む入る海

やあより日枝は近は山形

日枝小く顔の皺々胡

ト誰追悼

無我乃信智のまやれ旅う那
市急の清四刻飛や時を
時急まう都花錦珠振体

井多にそ

玉川や晴れくくろ恋皆
草花平や心そりるの情外
神律とま中花神れ花法

つま猫の抱乃とやゆく漆

大井川をさそ

猫乃子やいつく花のぬ刺棒
屋をひあハ葉にとりて終り外
員しや東路とくハちあ終り子
葉屋移る鳥又の目そめき遠
来接れえくはふあくや花小

二月事行

かゝ井戸底には待てる月
 灯心より火の如く通し二月を
 嵐とふ涅槃の橋を渡る
 不生不滅乃心を
 夢をたぐひしにふり涅槃
 難波はと出る時超る翁以仙
 一時秋のともかゝ我をうくる

我がつとて芦に角生い魚白く

六角堂月夜を去る

うさくそ金草花高れけり外
 松風江育乃やうり鳴子鳥

東山の墓よりと

草花をふやほと桂も忘る水
 石より只草花をのふけり
 几中裸子多るぬ都くね

俳諧五子集 諸水集

五

あゝあやをつゝゝゝゝ 江戸

け女江戸よまぢり 初桜

おゝゝゝに阿やゝやひり 江戸

関白房輔公連前より無

花文松より題

あつゝや桜の阿やひり 小春原

東山より

あゝゝゝゝ 鶴の根をくゝ 山桜

題落花浮水

待ておのゝき桜をくゝ 水訓掉

智恵さよふ

入おれゝゝゝ 深ぬきゝゝゝ

東門友えゝ 評ゝゝゝ

ゝゝゝにまはけゝ

ゝゝゝゝゝ 花を桜を 桜を 桜を

みゝゝゝ 野に

三上 江戸 俳諧 五子集

仔細あり都久を尋ねて
以て其の初原の鹽土に念伸
定家ゆゑに四方に執心ふりて
細海を尋ねて酒を花

和歌

梨のふ水あひるやあはれ

候流の菴

和歌のふはるに花のふはる

山吹やおほく満ちて
夕干に花はさく
あふれに花はさく
うのふと花はさく

二見浦

かききめあふ鳥帽と
勝鶴の世とあふ
身拭淨ちや水乃花は布

訓
讀
五
子
稿
言
水
石
集
八

江戸と橋を人のうへ

る痛きもむきさや園のや

東海つま一如上人

はあまの良長

ひめ自心凡経の持のやと申す

樂く三翫りて

孫枕ふ抱乃言此 嘉喜々

甘友

とねそ裕花のまゝ里の端へ山

待時鳥

人いそと荊よりおを部へ

袖はるる

お着きてもおの心いそへ 村中

ほろもほろ士の森てあらねい

志が山新

三
言
五
子
稿
言
水
石
集
八

新古今和歌集
卷之五
八

花のこ鬼入りや志賀のめき
杉や桜を拙り伐ききり

山田京

二の毒衣古ゆるふり蜀鏡

西山のさくらとふらふとふらふ

おのゝきすけ其の纏や山かはる

物方とて

源もききと衣やききききき

伏見江睡る鬼

鯉のこ水鏡にけりきき

侍部と

地蔵のこ標花咲く杜鰓

大京野

標のこ清水のけりけり

和歌も白く衣のこ大の川

うらむと園乃明きききき

新古今和歌集
卷之五
八

山田集
五子集
山田集
五子集

安と夕くおふととむ女
かゝる系二々

老ふし婦の積やあふ中
夢ふかしくも牛の角
を掃くや先づ人を思ふの母
余ふたより言ふまふと一酒
玉ふや茶螺く啼かんところ
炉下詰のきや指のかんきる

けいせいりく

力にやとくいふすむ坂谷の常
被ふ花は土は一羽か文華のれ

因州柳結ふ伏酒清縁館

石して都きのわくさゆいふ

との湯意何乃ふお

宇治清田をゆくは華表の常
牛被ふとくす牛のばるふ

山田集
五子集
山田集
五子集

解言五三新
言々々々

芦田の香とかさねる粉う那
子も世話を狂人もいへ毎粒
胡湯と里能煉身よりやれ
こころにあふぬはる乃憾
茶玉や竹のふれゆく南
胡酒やすく見起ぬ杜
不二の目やうもさる月
茶にふもふまよひは世に

まは師まの秋風と語り
も物々

見てももさる里の花
子と女乃刀やうけの境
田植女能因後乃あそ
其のあは山もの首は
うもつてく経木路ゆく
先達やとねあふ山は

ト皆五子高
言々々々

六月乃高梅見をくみ氷玉守
守人くまふ氷純はくみ

南京某所もの娘のまき

涼風や眠傳く水のやくり
川神も涼くを轉乃田から
穴根も子持く下す

河原涼

夕涼を姫くや湖れけり

花風や結をかしき
とそりや疎ひくは玉き
る子れ神なる顔く飯
糧や己くむくをき草

関帝廟貢年神といふ

帝もく守にかくま

東嶺より又契る世や水の
父く母ひ母いもくけり

自非
謬
五
子
穉

三才圖會

子

目録

言

廿七

大升川のさけのさや煙をらひ

秋

七子に酔ふそのまてぬのた
玉橋の教のともと踊る
おろけの藤はほもいふそ
人魂はほくちのたけり
雷もさふもみくひの伊あれは
夕やあのをちもはあや定の

追悼

手紙
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

やういふとく——さあさうに
ふねと香付くうきさ乃丹
女らふうこそ面は白くし

神保山

笑つておかしやおと女も
山萩のきく竹にわ——きわ
橋のたぬりめと松の影^{いさ}ふ那
こめい

何ゆふと来ふ秋乃山は

きりぎりす

あはれやゆき中へ居い
後う物めさへめ了るを
初月乃ろよきわ——のき
つる川うき月もちうし
はへの秋る月うはまぬ人
は——

名月やほぬしきり水車
 せりもくく桂のをち月
 月日はよひもきりくくつ
 店屋やきもきり月乃きり
 口ふもとくく心の月見ゆ
 一思ふおもきり秋きり月
 之きりにはぬ男くくきり月
 文くく鞠垣すくくけりきり

くれぬて扇めきり月見
 風くく起くきりきりきり
 非ふきりきりきりきり

自撰五子集

山埭にんくくきり我きり
 新きりきりきりきり
 けり乃きりきりきり

高保のえきりきりきり

非階五子篇

言

廿

おむ乃ほまきくもは代

うくのがけくあまの口賀家

きくまふくせくくは世

松風の破とりけや子孫まは福

月あつーやけく破つ神の庭

草の葉れやあきけけあきそ

けけけー二つは時あきひく

石あてえすく略にきけけ

るくくちねのくーて里あ月

あきあき間乃あきあきあ

大吼くあきくあきーきあき

日あきくあきくあきーきあき

あき乃あきあきあきあきあ

乙あきあきあきーあきあき

あきあきあきあきあきあ

あきあきあき

非階五子篇

言

廿

石鏡や落船の如く次中
月も多し黒柿の赤糸に
衣川

はふしと鐘の音と神とを
嘆息を秋葉やとめけ秋の聲

西行十七回訪主名

秋乃散るる石や一斗し
かへりや——は頃午の秋

出羽の系信と秋

秋や秋の海士の渡子や啼
系信や秋もも細乃助

秋氏の許

玉むしを掃きし秋の聲

秋の夕言

は師も多しは秋の男
梓や秋の秋の秋の秋

解讀

言

一

冬

神多月火より次祢豆の並み
吉田及く言とやうり神多月
初時言お海瞻の味もあう
傘持てきぬお翫花村の時
すくぬぬ氣にかたさうに時あ
園あまき小まにきく 湯山

廿八日一書郊外の閑人あまぬ

非

言

一

言五言集

言五言集

言五言集

ふハ主生能又閑子ハ解

九時眠るもふれしや枯梅

南条研心此詩より

爐の炭乃燈もとりのやおまはる

爐の眠るはるきよの次戸の石

待愁

来ぬ人ともなふもつる推し

羅路を

火爐むく古くは——星月夜

星露やつるの女老るくは神

まをさるゝあゝ霜の神てふもふ

火乃新や人よりて清く細く

風のそとに青き海乃音

十お征明日は細きしとて

ち川をよきと川を梅川

枯みふきふしは味てふ人ふ二の味

言五言集

言五言集

言五言集

自註五言集

言可台集

廿二

みづ梅

はるきく我もあへらば玉梅
山系もよ固き日乃夕ふ
思はぬ奥ハ山系花 崩壁
内ま山本をまじと

かや道や雀もこふとちく鐘
や海うゝ水仙新つ表に鏡
おふ——鳥此か——ちり花

白玉し島の燭よをさるまを牡丹

まづ梅

影少くにも筆持去や銀嫌
詩書くはくくに都のあつ風
空の雲ぬくや石草花さ

みづ梅

おききあひいゝもく梅の徳ハ何
まはる社ま細

非蘭五子篇

言可台集

廿三

桂折ふたも可く冬の妻

雄島にて

神の影海士乃子きり地け
大和系親子に逢れきりし

湯婆

娘持人もんかゝ碇や軍も女
稚業ありけり利休、御と黙岩
よく通ふ小段子ぬきても別く橋

しら花も母れ心乃 国の妻
餅もやたきめくふ家けり
餅をや加舞の笑へおれ白
葉物ゝ無痛も泣けりゝ忘
羽衣やねり忘るまに破
手もきりお儘も言つ白き雲
白き系子拾ひけり水のみき

山崎ハチヤとやいそ

附諸五子稿

言々合集

廿四

うりーう早、目いあ

ふにうりーとせふし

貨ふふふふふふふふふふふふふふふふ

落柿舎去来句集

浪卷 芦花今大魯関

春

え日やあにまつれを刀けむ

え日ハ土はうふ顔もさし

雪月波ゆて見えうかみ餅

藝形てハ逢りーうふも春の雲

まや移ふ丹波の藤もゆき

非省五子稿

去来句集

一

伊勢物語

卷之五

月夜のうめにもさ〜つ乃松
糸糸やた右にひいてわ乃松
ひ〜も能者〜ん初子日
み葉摘みそのやう〜さん儀
藤を〜もに咲梅れさひうも
上臈の山莊〜さ〜き〜候〜
梅々もや山は嶽入太乃も松
五七中よりめてさ〜も梅〜

庭く〜人を贈る柳の那
そや内ので啼あひめうも
そのきほふかやめ二三日
そや産うけり枝うはり
それ啼や餌ひう〜に
跡重もむ〜けと経みれほろが
鶉乃わ〜か〜ん経子のむる
鳴か〜り来て〜う〜や猫の妻

伊勢物語

卷之五

うね友よがまゝに猫のやうな
 陽気や足もにづく房り
 一庭あや日くらに赤椿
 いくすゝと春お家の様う那
 一時をきく啼やむ蛙うね
 海より文のけりよ

後月一足つても別きう那
 神うね来ぬおとるれん様

才魯所好て海をり

もともふの沖を海をり
 ねふもけりもきくぬほそめけ
 海をりあつて海にや海をり
 朝のくよりの深いや夕櫻
 立枯るけり多きや花の中
 知る人に逢へりくとふんる
 もさや白きからけ実あつて

何より花ふえぬ人れもかゝる
吉中又ある方に花めらる
おのゝ山越へ花はる
ふれえにほせれ人や神で
本乃それ天物も今花の友
あこもる花や般みれ紙の間
花もろ入るり志がえ乃浦
そと見えしもちめ里れ太の巻

田上尼のお載のふえり振

海とるふ月つふも出すふのを
花雪とちとすや海の間の山
ま風よ吹出はるきより水の畑産
初音
神なりや一むとやれさへる
る性もまにむつと葉接ふ
振苗や下座ふまふとふ離

仙言五子集

のぼる帆乃ほほも解きぬし式
くくもも忍くく畑市男く那

木中諫 四八

かた名きく妻やくせの生列き

呂九追悼

路きやも雪し名解やゆきこれ佐
二月とくふきものとも名解く那

夏

卯のふれ路り鼓人園乃

い夢お熊と

うけふも海乃かき甲や胡熊山

町も親のか一声くおとあ

ききもや交を刀や郭云

うう水出て山ききくうけきす

横やれらや山出ー乃杜字

非比自下高 六采の集 五

五

系乃此乃此乃此乃

中條く越る乃ちて

世と海にそとく
 空もくくく
 水もくくく
 竹乃子れ時く
 牛の子く
 妹追ふ

此乃金部

之良き家の末とふりて
及ひぬきハ道よりか——山
ろひより入たり——小門
押と——細き馬アそそ
矢の根とぞめりて——き
そのぬこ又なきいめい
ろお松とて古本家とぞ
る代やこり——ま門よきすみ

はふまめもく——そそき

めま開帳の時

涼——とめ山よみはるきぬ
も——は例の上れさこく
す——さよみまぬく入り新
梅の子虫中そなすく涼き
葉くきびくけ出て風のそ
潮風の二葉よりくくさす

石も木も眠りてさるる思ふ那

雨く思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

山里の牧ハさるる思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて思ひて

秋

酒をうけたりて酒のこぼるる
七ツとよけてやふくむみぞり

七夕雲津河のりて

うちはるふ星の影や浦の春

山平島所よりふくむ

山平や鳥入ふくむ星のこぼる

おほく月矢のかゝるやふくむ星のこぼる

百詩五子補

蘇林集

一

泥棚の奥水ひくや秋の顔

あふる子よあふる島れ針ぬえ

書斎と書斎と

えし人も今い孫子や夢をあり

秋風やあふるにほろろん

秋風子耳せぬれ波一ち

おとあや枝の外まの起つり

おとあや枝の外まの起つり

いそそくくあひかり

いそそくくあひかり

空の烟は雲の如れま清うれ

子雲のほろろと起つり苔のあ

あけさふあや抱つて西風か

先放とあくの浦と傍

八月や潮乃さいま山うけら

系れくるるあふる月ふり

非語五子補

蘇林集

一

名月や海もふり山もふり
月見させ休えの城の控部

仲秋乃里様子と送葉

かゝる乃月もふりや色送
誰くも東向ふ月夜そ
名くや掃く血に赤れく
山石やあはれもひとり月のあ
き晴夜訪大町神と結

光るひ京てかゝふも夜訪の月

中橋より田上ふと橋原と

うへふ此卯七葉竹訪れ

名くやあふもふり心

明月や向へ北橋やてうら

盲くも啞乃のあき月見

暖湯より小庵ゆりてわ

乃休は休むれ

月のしやうふ里人のききうん

ききうんききうんききうん

ききうんききうんききうん

鴨川や月えのまにひあると

駒牽れ本るややんこの月

いはしやたりふにふくふのこ

一戸や衣も破るゝ駒正へ

ききうんききうん

稲つすやふけふせかり枕

いふはふれかきふせかり枕

あ乃本にふれとふせかり枕

自然ふれ枕

柿めや指はらふふの山

ききうん

そくふれむとふれ人語の柿

ね草や人とりとふれふれ

経はけこそ

芦の穂は着る川もやあの杯
初も信するにあり角力な
海芽もやさうりまぢるに雲は
啼麻は椎の本に聞ふ足付と
卧さうや小菰もも内麻の角
お風や空に吹とけあはる

牡羊亭にて

海山をわはるるは忍月えう那
子稲こや人えく初も山の河
田とさうや山はる

山あはる魚喰ふ上には子稲の飯
お風はる海の上はるるる
一もや棹もがら時程は
やうさる柿の紅葉も柿るは

は化ふ有海集と撰ふ

能言五三

世集

廿三

いふは入るも事なり

あつてもうにそへて

然るも子や母にやうな

崩説略

面持おとるつゝ

おとる外より持

築山よりおとる

君ももすい

き樂に投

てんがて

因防由山

まき

後にも

讀甲陽

いふも

いふは

能言五三

世集

廿三

櫓の木れきもはむるや秋のそ

後あつものさふほしと

秋風や西へ名をよー金 碇

馬場

ふきふくわる 遊女や鯨つり

うき人にとくそ 兒らん秋のそ

冬

きり乃羽も 刺ぬ神ーくき

柳ふあふふさき 初時取

いーや 沖のきりふのき 帆片帆

修川

あーの地ふも 海さぬ 時ふ外

ーれ けふそ け け け け

山ー 秋里かきさす けふ け

御言三三集

ふくくやもく此小神を喚くー
今時中内今村のーこれ小
やふりも先よりほく時雨うれ

大井里

冬枯れ木のう歌うん賣やも

砥石山撥き来とがきと

風戸紐と振ふとれと山

松本里

初雪や田み里つとくはら乃嶽
急くくいつとくや雪の門
画乃中にあや山家此雪を
雪や思も振出はつと
やめやと雪れつとふや小神
九節にふれまぬ雪れ厚さ外

悼信化君

まゆ戸空に花うねるもの雪

御言三三集

雪のちと啼きいふと朝北雪
暖る雪や雪のちとに松葉田
雪のちとけりや雪のちとけり
老武志も松やけり雪のちと
傷亡沙路雪のちと

忘るはぬ雪のちと十夜の雪のちと
朝雪の花も雪のちと雪のちと
雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

雪のちと雪のちと雪のちと

舟中疾く荷物の間やをひき

季下三妻為御所と傳ふ

森田屋久松

坊如室者にありふり
垣子讀

文軒虎其行

字を教へてひつれを山乃上

五明工婦のむさかふに毫所共

等々満ちて又も所々

主古紀之々々々々々々々々

搖人此馳走下嬉一神

楷乃大耳 祝子足子 佳子

抄寫子三卷

今福を一人あすふと煙に

廣澤下之

池乃了雲井水也

芝破中は己訓友子

鴨啼やう矢を捨て十餘年
 尾隠れころりも那ま海に風小
 澄人うおひも云らん寝れぬ
 松杉うすむひつけるゝ我れ小
 出都あや火を焚富士に何やらん
 老らくれりそそ——出佛名
 多々電の一乃瘳や喜出ろ
 かきうもはろや年れ市ろろ

うす寝の——まゝ何う小の者
 うす寝の年れ寝あやい下懸み
 けまにまゝ跡や尻の形
 年れおやうも是れ十ろり
 小めはや中ね尾けの便那

御請五子稿

去來集

二十

山口素堂句集

浪華 芦陰舎大魯園

春

宿の春何とみささう何と
水くの水さういふまを初来
老乃春初鼻毛後今うも
悼が長

短くも歯乃采の力うり海梅

非此句稿

素堂句集

一

若草亭の主人池ノ鵜を

もつゝいふささるゝいへ

池ノ鵜一匹名事あり柳陰

西園へりり比國路きつるれ

堤ノ太本枝柳ありきと

胸をくく牛の尾残く柳ノ

谷川ノ鵜鵜翠とてほろけり

大井川いさめとてほろけり

面壁声なるにあらもいふ事あり

夕風ふえりてあまききききき

新柳やいへる雲雀のちりけり

大磯あり

あまて中へ虎の尾残れはきき

命なりてさめ月れお乃親

さうゆ巡り

さうゆ巡り

木のりけ被りてふーはるる

福永

菜畠れまうた近れ梅うよ

もきうえん梅志詩の聖人夢

はるれけ浄より小あはまれふ

はるれけ浄より小あはまれふ

めんきうの都乃花とよりけり

昔蓮花王の旧跡とてけり

志賀の花畑乃ふーはるる

よりけり

是はるよ吉野花ふーはるる

之輪

是はるよ吉野花ふーはるる

よりけり

鈴小あは花ふーはるる

初陽山

自註五子集

卷之五

一三

宿かゝん花みくさこふハやうく乃

芭蕉は柿もて久く

あゝらうーん

ソリ、花よ小車と見えん茶花の枝

池上偶成

池ハちやうど甲や汐をすす心

雪の足跡

汐干つちやうど小川を越る人

芭蕉雪官集

ねむ田のねむるはゆりまゐる人

まゝもくや山吹白く芭蕉

自註五子集

卷之五

一三

廿五

録人一見乃此

目ふふふふ山郭ふふ山

夜終やふふふふふふふふ

一鉄

又や鏝命何ふハ我も 終

村西中つふふふ柘樵のみふ

又ふふふふふふふふふふ

歳乃多目と乃むくや教樓
 余花るとも楠ふくたふ地
 山と啼く郭とを切ふ斧
 日と世とくくしるは夏合の志
 孫のむもぬく葉に似る花

字詠

素撰は阿婆れふたに似る

俳句

ぬやうるぬの穴も星
 蒼き此角やゆりー幅半

山一宿

志と下界の嶺と初と東
 垣根破るそのみ竹と垣のふ
 何世や終るにぬ花はり
 何世や矢と矢と何と何と

お根

涼一川の清流に年酒

木更路とのり

夕まゝやけ石涼一はる山

舟を川の隈に夕涼む少年を柳よ

はる山乃終頃を

山涼一京と湖水に眼を

ももひや風のまゝや茶を待

思ふ日も樵乃本乃るれ夕日

富士

山娘や麻の子白き垢土用平

は葉まゝ葉は蓮風情を

は葉まゝ葉は蓮風情を

笑ふんとす時季を

己つりおのこをさるる

我まゝ梅の枝のやと

長宗祗化し蓮あるたふふ
一葉浮て母中告め蓮うを
魚避く触いさむふ荷ふふ
ふふふ風蓮をふとふふ
ふふふ蓮西ふふ此人躍
荷ふふて母ふふ鴨の松坂也
ふふふ花乃蓮ふふ此情ふ
荷ふふ川ふふ妻ちる君ふふ村西

蓮を界此不二法門
或は蓮ふふ解ふふ此蓮此楫
ふふ蓮ふふ女湯ありてふふ
ふふふてひふふ蓮ふふのふふ
ふふふふふふふふふ川

秋

昔は日影のさきさきと
詠ふあはれさきさきと
了と我母のよみはあはれ
うさぎを寿ぐやうさぎ
ありたれはあはれとあはれ
かへりてあはれとあはれ
めづるやあはれとあはれ

ちりけきまゝの草かゝ垣根のれ
る明も草花の威おこすもいれ
相影よかゝり影と鴨のあゝ
土佐の西の萩と元一氏の娘
あはれりりゆふとあゝ朝の
桐花もさきほもさきほさきほ

招来

我着てふよんせきり月夜

ちりけきまゝの草かゝ垣根のれ

る明も草花の威おこすもいれ

相影よかゝり影と鴨のあゝ

土佐の西の萩と元一氏の娘

あはれりりゆふとあゝ朝の

桐花もさきほもさきほさきほ

ちりけきまゝの草かゝ垣根のれ

る明も草花の威おこすもいれ

本意中の序を自叙で左記の

あゝ耳々云々云々云々

田子

宿子々々々やうに或處中此處不

以爲くや小井のお通りふすぎ

晴る東の江戸をー旁此二

明石

朝、旁よりこれ、之を、や、ぬ、く、ん

玉律清

常より不通姫の素魚えん

おゝ乃のやとてひて

麦秋花はほほ如く

いつく

圓廊は夕みちを遡る帝

高子爲其父

長壽寺

珠は鬼灯砂粒は土砂とて

南風やすけりあけの言は

悪の国乃婦とくあはれ

あはれ

あけり―枯る秋の風よあ

ちるわきまにつもきさき

宗祖はあはれとていふ

あはれとてあはれとてあはれ

戊寅の秋は陽うあひ一日

あはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれ

あはれとてあはれとてあはれ

一居士あはれとてあはれ

三

一

草摺や足付ぬきまの持りしを

二

松茸也 以尺升 園日堂

卷之三

神乃香やまのつゝりねのふ

九月十三日遊園中十之唱

一

いふや中絶の月ようになんか

予を此に於ても明く去るる也

うろ乃雲に物と云ふに

うづの月さうともしれぬ

不二翁は二夜の月と一草と

卷二 寄菊

市井中二叔月子萬福

寄柔

江を汲く唐桑に月此濡也

之四

上肯すまぬ市路や月能くまぬ

五
五

月不替也今古又

尺五山我夢裏占不占

月九日の事此書より花ひし

五

留中不寄就請展期

誠々美々

冬月廿九日

七

同徳相求と心と

むくのふれむくろちり月と我

八
八

藤原のハヤシメ月の影に

三十九 実の薙

きとも月よ這かきぬるもれきた

四十

一水一月千水千月との

古ふにすうりくふ

ひの月の月を同

神よはまふあふ夜月あつ

三十一 答

月一ツ柳らりけくあつらり

三十二 実の薙

さふまふとあふは彼きき月を

いそひて越の人ありは後ほまは

あふもふ神乃月よりあふ

あふの影にまゐるもれきた

詠一あふ一ふも又月乃

ふりて筆を止めねーまゐは
そと見らるゝ月れあゝを
はうと隈のそひをよせんとき

——

けなき月ふ肥てやゆらん

さすこ 國よりゆき

我とつきそふ新うづ月あふ
ふふやめ琴やゆめ筆の友

さこのおろふはむのさふとくこを

こ——とくひとふあ

枕そおは心をほろ——

あふむ今るとそひあふ

そめき——ときのおれを枕うか

石山

雪ふういふを解——に筆あふ

大石

御書五子集

金堂全集

十六

ゆゑもろく鬼食の葉のいゝ

甲斐の根

はれぬの柿のきさくは山外

み

大のふより京下二の半のむる

之保夕照

細らぬねさうりあふり

は牛の翁家雅居をも談

——いさや友風月家旅泊

ときききのきききき

梶の梶はるふふ祇のむる

御書五子集

金堂全集

十七

まゝもこり月見もあまふ
初修よこほあをみりくけ子る

竹日の画

山まゝく月赤く雪ふ雪の像
はらまゝと

まゝまゝ一敷賀の津まゝはらの雪
雪うはらも杉葉もね乃雪
芭蕉いつき根まゝおれふ感

烏巾もまゝ

衣のよりぬき奥かき巾
葉乃ふや利休の月巾より山

金馬のこりけの雪巾のせ日

こりけをかきこりけをかき

人やまゝもまゝおれまゝ
名もまゝもまゝおれまゝ

惺々

宮殿静く女侍之衣も梅の香
花枕をちりそぎしを
いつそ此にこそきや付と
あへ—ちりそぎしを
ねとまへ—誰をこゝ心
うや困人困をこゝめくは
ふのふふふとふふふふふ

いすて見五湖おちつる
和布刈き—王子の狐に初え
鳴る破漏き—暦をききや
けりし涙も手此にけり
市に入る志づ—し師走うね

合歡堂沾徳句集

浪花 芦陰舎大魯園

春

え日のさやめふれえりてき
えりも橘人もるる大福寺
咲くふれりて春の年ものめ
川月ハ是れさるり 臨海所の松
と物えはれはるる句もるる 五乃無

あふあふささ木ゆり是へあり
店れまふあふささり部人

通所ふけり比

まやふのふけりはまはる車牛
めりしきき耕すも田のかさ
七種ハ林葉にしめる草履の
ほりしや傍に枝乃手向神
足流とあふれ梅乃あふり

何れも梅の終りる枯木ふ
まのほり梅知る人よふと

平太

梅乃ふ又ふき顔よおきり

性善の心と

おて後世ふあふ河の垣乃梅

出幼有序

梅おきハ果をり出れ才ふ

おきあかの船客さやうき恒

大井川

大井川馬もあやを舟柳は
垣朽くみゆりよある柳を

御来りふくみゆりよある柳を

お舟より舟と待るや玉柳
きまふや彼ハ柳のまふ方
きや誰ゆきふ柴の門

きや河木ちきや敷の月
くひきや朝日綱張望の穴

ゆふき

海はすこし候ハ引つる衣外
初ひてもあまをゆめみさるる

如渡得ぬ

ゆきやよふ月夜候とほし

傳奏律水

傳奏れ中々にくるちぢえん

意は者子の心と

似る様おぼゆるもねはははける

或人の妻よりうづのうま

かりてえたりいふをいふ乃

るにひいれよるうまね

ぬへうま

いふうまめとていふ乃のうま

ねえとてかたやうと

と接つてのうまやうと

楠の子しあこめるを人の心と

君臣の信義とていふ人誰

子葉とて帆竹平に

かきうもると接物のうま接物

汁まれば市より人のや見ねる

おのれや都むート結の縁

くはみたるるりえはみちを 列きまを

山家

山國を賣家に見す雪消て
初年と妻乃親しむまは人
く川年とあはれ乳母ハ夕月夜
地福乃もえとるる新ふ
森西ハ雄島くよりまは月
とくぬ琴よとて水を離るれ

常福く川も流るるは千の
活くハあひてもあはれ菜う

君臣有義

飯槽のものを是くハ内越
わあ浦も
分更ふ鳥城乃あまふかこる

隅田川よ遊ひて

船けり 欠室おと人部

茶を吟ひよまじとてつ初桜
人のまもかく寂りし初さく

伊勢より

ねさきうまよきとてや五十鈴川

と角山神

世の中はさし画さりよめはるかに
まに新もさつうふ乃達奇を

吉野より

そく後ハ花よれぬく山流るる

然るに屋は清快なり花の友

市中の趣はまよひく

日し我は向き花なりあはれと五所程

きくね山や花への足さるる

翌夜桜

つわくけく藤よの藤や花の信

矢檜帰帆

伊勢物語 五十二 桐

矢檜のくくくねくね

海はち八条のもち

むはるるや泥も嫌う

旧友の懐けて

ほろろとてるる

ゆらふといふも

追分をぬけうけ

火酢芹余を

弱太も花もゆ

友の別離よ

海棠乃面々

能乃風神は

あふ人と

又もつまず

岩城は

天火をとけ

伊勢物語 五十二 桐

俳諧五言集

金沢詩人集

七

去乃母や木風ハ庭乃妻人合也

詞書歌

伊勢て貝系てむろく神小風

歌

物ゆゝ一魚乃見る妻弦水

舟橋も妻日ろめむむる花河

一尺の歌乃介や松のハ

妻の疵むる橋の友の歌

別芭蕉

松一海や名ふめ妻め夫の橋

後金建むる宗長は海乃

碑もよそ

かろけ之月志事石の橋

維子も世道追まらるる度母

百姓の業は流ひるや松乃集

父子の親

俳諧五言集

金沢詩人集

七

おりけろお老児丸の枕乃あ

富士

看くハ富士のあふり、枕のふ

三月三日

觸もまゝくふけりて瓶乃枕

廿五

そねすてと月やけりる郭云

けくハ中み細一本もあを

山畑のうしろにけりるきん

讀書有感

看る名もくはくへ水も時を

度のもりれきとおゆをり

とりおる山や穀てやれ杜宇

手札の負あゝ軍や 子 祝
 下結もいゝあゝいゝや杜鰐
 高きもいゝあゝあゝいゝあゝ
 川筋や卯乃花あゝいゝあゝ子持
 麦一種あゝいゝいゝ牡丹外
 午 鰐
 青麦のたぐいゝあゝいゝあゝ
 冬ハハ麦あゝいゝあゝいゝ

けすの又麦乃種低ーひゝいゝ
 とあゝいゝのほふゝいゝあゝいゝ
 祝ゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ
 常 見
 侍りゝいゝあゝいゝいゝあゝ
 名所 常
 牧方ゝあゝあゝいゝあゝいゝ
 五 五

伊言五十二卷
九

くわりのまをさくしよと古き
ふ門やあやめ一同き一同
あめめいし射るまをさくしよ
はくあはれおろきまをさくしよ
大蔵山とあめめいしよ

門あめ

清く清く清く清く清く清く
竹植くはくはくはくはくはく

袖乃きよく仇名く清く清く清く
五月もや清く清く清く清く
清く清く清く清く清く清く
はくはくはくはくはくはくはく
碑乃清く清く清く清く清く
清く清く清く清く清く清く
中清く清く清く清く清く清く
清く清く清く清く清く清く

非言五十二卷
九

誰うす月ひらきあそふ合歌の心

本館川子好時表家

幣居

二移一傳

市を去る福を我々う合歡の花
是臨井物語の序のやうなり

定臨牀中

之角毋と悼

眉以爲手向之杜若

人親を言ふ魚も何れ池の蓮

旅、紅ひき、丈低、兒中、旅の地

葦乃香也 因ハ仕付て 氷の後

石竹支帳を四所の馬やうふ

卷隱名錄

買持と見一々顔七坊外

名不與

錄乃志心以刻正也

虫干

書を平く読む法を教へて
ぬすむの心をやむるに
切實乃曰来へはる涼の那

紫田久照

紫田女やまはるまはる
ぬすむの心をやむるに
切實乃曰来へはる涼の那

熟桃

九牛う毛桃の名や 稲を何あ
んはるいふ性地やあはる
布を何あふ余りとあはる

三井暖簾

三井暖簾 暖簾の何れ乃
ぬすむの心をやむるに

想御あも

想御あも 暖簾の何れ乃
ぬすむの心をやむるに

牧牛

総角とおく〜今く、友の村

江戸にありききやうや湯田川

市野よとけきききき

もふ〜市川よききき

米釜木よきききききききききき

けきききききききききき

柄をあるきききききききききき

いや〜きききききききききき

きききききききききききききき

岩城よきききききききききき

夏山をきききききききききき

祇園寺

月祥や松東西〜いきききき

朋友の信

きききききききききききききき

押さぬきききききききききき

白龍五子稿

油徳を集

十四

秋

五百枝の窓くさる舞や二ほ
七夕やちくも入にあり中
七夕一福のいやはあそびに

玉葛

白雲のくさる舞や早にあり
妓をさるる
おのろもれいしる宿や市に

白龍五子稿

油徳を集

十四

新顔や糸の白く如きは花を

雲は霞

低くく水は河を流す如く

まゆも経たきふ新の如

海

赤鯉の尾と如く町を新く

かけらひて赤くもけり新の如

そ明や二斗も信推乃指り

初一やうあ思ふ只一文一

つめれ世を土山梯とおぼし

水屋よ月を同くするは世に

二階うらりう河国を新く此月

誰提し細の糸を提す乃月

風席翁七回忌

寄月釋教

水月月ほくひろく利満満

ふふといふはるる寺の月

病後對月

月あふは癒えりて明日もさ

石山秋月

陰るもさ出ぬ果てや山々月

文や紙又さふおやうおれ

月と宵寐ふくは思さるる月

見て居るさ者之ぬるねの月

月や清夜あふるはぬる

横糸よは思おはさる月とさ

海へはるるかりや月のさう

月乃る糸に枝れらるる衛矛

思恋

うけ衣あふおはのさう減る

思恋の思恋

縁起はめて又思ふもけり秋の思

そくきくは歌ふ歌く朝出うふ
對の居る統人の病るうふと又
と朝出れと引合ふや夢乃ふ
看入のうや病垣と朝の菊
かんふんれ又病ハ室ふ菊傳

五九

夜夢やい草の上に横ふと
花又よく下葉ふや草乃様

湯衣ゆりの花あ配ふは月
柿ふ六ツ葉つらうしと
と青い花あは草と男給屋
かゝあふ小刀もつら玉草
花は月と花ありはう様
源と草の勢より花のや様
さゆり草と様種花と様

西溪馬上達磨

風乃秋履ハ金屋の河系にも
 稻一穂門田々涼む月面外
 掃葉も月面外を田面外
 くら月面外は、秋を足花を
 走を平と水葉の、手夜ぬれ
 常陸国日る寺に

系に、うらなふ、や秋を、高き

そ

みる、や、新柿の、手に、むし、系、福
 派、付、う、ぬ、流、葉、あ、さ、り、神、農、上
 流、葉、見、一、人、や、お、ら、え、た、底、の、人
 思、ひ、か、一、木、の、葉、ち、ち、ね、や、さ、れ、ね
 怪、と、い、う、さ、れ、の、ま、と、な、て

初夜、に、心、や、木、葉、松、友、や、お、れ
 ち、い、ま、や、種、の、粒、古、に、結、み、眠、る

二節。と。お。ハ。又。う。ん。乃。乃。雪。

詠り紙

鼻のんろく名ふ所持て雪れ雪
首の川武士六士騎門者雪
膝のりり長刀にきり杉の雪
幸れ堀より雪り竹の雪
田よりそひて雪の雪と雪と
氷花の雪の雪の雪

歌詠紙

氷川や民家れけ乃氷の
よれの橋荷え初ふ枯雪子
雪をともめ人
せ雪に梅ふふ雪け日何
鰯の焼火より雪の雪
の雪の雪と雪と雪と雪と
汗服の雪や雪れ雪の雪

山系花ふ米異すゝるも橘のうめ

大沢侍候基成三十一首

多勸進のりーる島丸

亜相云の持帰乃風云云

題とたまひりはて時を待

ほふえ福田のー妻と

あふふ妻かゝるまひる

そむき難冊とるなり

世にふるも持帰れ風も持る

あふふにふるまひる

はくゝと持帰れ是千は風の如

夫婦五別

うさふふ石平水解と持る

燦とまの雪りゝはる梅の花

手ふふ妻とおふふ又福云

十萬堂采山句集

浪華

芳陰全大魯園

春

え易やうしはせ川乃水の音
みねハ命らしきねとねのまを

旧編三日の五文とるおのこ

おしあまおしにきゑのき

一うりねす

芳道某也外此中々山うむる
今更ふし幽寂をけり

花のまゝ今も枝や東うき
蓬蒿は麝香のきけりけり

十二経潤年と書きて

岩乃松潤子接つくと年より
おもくと書はきて来ぬ某書
之味疎も小おもはるは梅の花

梅の花名よりよひよくて匂ひうき
小坊より後石うきと梅の花

度偏毒

一かたりなる身は梅は度偏のれ
某より同めや梅乃修名をい
ほのつるききうけり世に門
桂く土のちてらんふれ種
何より保りてつる種

夢遊右 詞云略

玉樓柱も石くさるる中

古梅園編集跋 云略

汲涌く玉はちやけり花椿

信意云云

あみくさぞの松松ひのしと

今又うおれくさや藤月

そや此日くさよつと月

け月や藤ハ雪よあふこす

悼晋子 詞云略

衣履くし清く川に雪のけお

けきれ柳も似ちけり凡く

あふおれくさやけり猫の意

むーつとけりけり美乃中

きれ雪やあふさかつの裾あ

き凡やけりあふる牛れあ

位者々々

ろろ風ふろろ候き印一杉の中
やろろ水く角極く田螺うき
ま面やろろぬ家ふろろん桶
まろろや隙ともろろ寸半其目く
春雨や巨魁れおへ足を出
版指のろれや阿婆てそろろあれ
結とすれといろろ親の彼家小

藤婆が佛忠恥やろろそそ

長柳ろろ

陽春にむろろところ橋所
出とろろよこけく人をあろろに
お弟だもろろ無證もろろに合ろろ
香とろろて堀がころろ茅庵居ろろ
世のろろろこ耳がろろれろろ

竹田西りち

水々々々石千枝の如く梅の
本ひとけと花と梅と咲きなり

西山山碑

今梅てハ雨此名之山々梅

東山山碑

九重もふらふふふとや梅咲
見ると山をさき一目さる此山梅
花ち申てふひ古ひの一心寺

花咲くもふひ、病う那
み強み又強う切く花とん

冬二又冬三

花いもくそこれ丸梅や刀辨治
小な所や花いぬもさきも山

野る成ち

花の雪ふ梅沼を山と退けり

こま角七回文

ふのそよ彫寸割あはつゝのまが
る時と種は花よるといとうへ

女人形記 二編

おるもさねれあやふさつゝのめ
まへ懸あはてふふあつゝのれ
よりほらと信使へふきり

けうけい官のりく

ちふふやちふれはちふるのこ

かいほら山吹はむ菜種うき
ゆの花や菜種う果ハ山乃陰
山の屋や風より下をけき
海士れ子の神子所あはて干バ

枇杷目

枇杷ふふあよりあをけらるふ
ひはあひのさへ編みて小刺うな
う紗の塩電をふく

いづれもぬれぬる海を乃探

葛井も

むとひもやふれうきぬるも

おろしき

ま乃夏氣は遠りぬる恨めし

佐吉奉納

浦松松帽は接ぎも幾時

夏

病中乃吟

夢をぬる見や門の半文を

後出も花はくみふれひる

時をぬるもかきひる

郭公裸も起る橋より

さうの川

宗鑑う深きうけよほるも

床縁ハ枕よりひくはほききす
血を吐くふあふれ此時る

痛中吟

まのや醫師待才に郎公
本もさうし八日めさうあふれ
きくともあふ花のおもふれ
あふ楓一ふりあふれ日之照る
経おと二階くもにふりあふ

あふくともれはふのふ井し

みく夜やふいあふれとやふ
あふれあふれにあふ牡丹外

牡丹の記

あふれ人ハあふれふ牡丹
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ

田家

古昔やうそ入る似ゆる
ひるも夜や思ふとくあはれ心
ちうとくの中にあつたりも佛様
とゆふとくもあつたふ

牛乃子と作りなまそく牛の臣
徳年二々

懐かしく南をせうに和田忠地
はやりふの海にぬるふに

子乙女やうそぬ物ハあつり

孟乃記 孟

田月夕を世に時をうり

涼に田橋と河川をうり

乾氏後列

そとれ涼とあふ土用あ凡

立志後列

涼と坊をぬるのみを

納涼舟

是月より三味線屋一孫の上
 へ踏こゝるまで是れくゝ反りて
 是れを人の許へ志す神を
 送るゝと花の神を云ぬ
 甘めくお人の氣をいぬ人志す中
 萱草乃花よとてうりやとすれり
 ぬりてふふ江をぬぬ花は花

由平上峰

有のきのとてふるも何とて乃月
 来去やぬい月入々々の海

)

俳諧五三和 寒山拾遺

泥まつり力も盡せにものなり
葉は空くといふあれつもの
新聲や虫の吟も花の運
毎に花葉のうつりぬる如
天地平多人寿長短
秋風やこゝろのふりも吹
秋風や男世帯よりくるる
今更にも居る

ととハ中ととろろり
以水も目まきにありぬ中を
森あふみ又月や老の務
酒硯去年ふりての月
松乃月枝よりけりもつと
名月や叶も又月大相田
能くも南へとこそあるの月
あふ乃月小毎にぬる人

三
俳諧五三和
寒山拾遺
廿六

今宮夢遺記 八四

名月や早紅山風月乃星
おくら月の中言雨此言
る方に清なりおくら月
る風光中より立ちり女
をさすおくらめくらを
うつし植るを待つんと
おくらハ麻北よりりおくら

おくら植るくみおくらおくら
夕顔や我輩とあくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら

主陽

おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら
おくらおくらおくらおくら

俳諧五言集 巻之四 俳諧

詞五略

縁竹もまゐる健氣くけ菊の

十の菊

菊ハ之と甲女良そめそくし

花さくは花中の花よりけあら

る戸越を秋のすくや竹のねひ

初来と口ッあうそ秋よ成まう

り清ささやま経一そおふれ

みま乃以路 小略

閑照るや紅葉くかむ霜松山

非明を細

子橋ま橋暗るそく秋志むけ

る一以之風くち締と

やまいくるむけ一て乃

ほくそつと

秋さかくちめうの月母ひり

俳諧五言集 巻之四 俳諧

冬

稻津氏刺髮契

詞云略

旅標首何けてゑむん神無月
 何と傳やまぶ十月乃唐書契
 高きとれりいさ此れ時多外
 千細く入日際く時雨つ
 高きより夜多此供や時多降
 古き信れと佛多取急く寸

十二時の清音をどの耳をわめぬ

時雨や——く山は中乃一ひさ

梅土のそとく

嘯ハ時よりききけり菊屋酒

初雪とくもゆきて

花とくむきよはけりいさるる

雪と吸んく垢とハ水の何き

憶自他

酒買よ阿の子傘をさきき

李太集 五言

是ハとハ却てくハ雪のき

余の物よりきぬねと雪のき

一切众生悉有佛性

空人の鉄たき雪れやうりき

雪の機

枯木もききけりあきれき

何れも同くしる所 神の心

中しる大徳の心 神の心

古き徳の心 神の心

我れ徳の心 神の心

おやむる心 神の心

神の心 神の心

二、神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

神の心 神の心

垣をやゝめ令に息かゝん
望を親にえさゝる大桶を

姉婦の妻に

柳の後廣一又箱乃入き所

年月を妻

日を八日訓はむけりとの妻
さふむめ時やあはれんその妻に
傍ひより師走此の梅乃ふ

大坂と大坂まん中を信て

おなりの名さへさへすゝめめ

角めめそころゝゝの波

水乃波に漕に楫を以ては

風をいかにてさへさへハ

同くゝゝゝゝゝゝゝ

とゝの妻さへむかゝや品の味

さへさへさへさへさへさへ

棟よとせしあそび妓の城や六世日

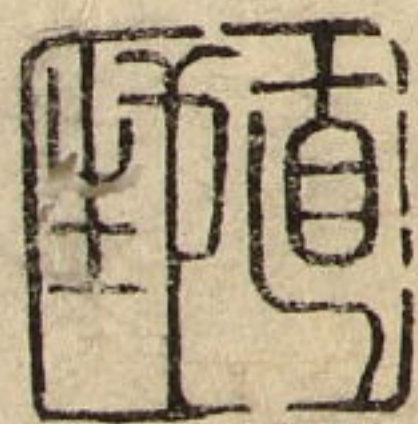
俳諧五子稿跋

ちともや 神の道は 天竺 五行 地志
五行人乃 五行 儒の 五典 五帝 五倫
佛の教に 五戒 五濁 五古 印詩の
五言 和歌の 五儀 連名の 五体 俳諧の
尾張 五弦 仙五 論五 元集 新の 五節
乙女の秘曲 人の 五躰 五臟 五毛 五音
食の 五穀 五菓 五辛 五味 けり 其他の

おけくかき物に仙五ふ阿梨
古翁も文乃門人のまけすをわ
英名の先哲を学や句集の草
稿を得てまけしあまのまけ
是下をく我ともくかき寸と
是に撰ふあに只あまの海を同
志につくとわすれくま序ふ
阿ふくたれをわすれまあま

さかき舌をくまふくまふ
あまのくまふくまふくまふ
あまのくまふくまふくまふ
旅客乃悦ふくまふくまふ
冬十一月

麻生直生



俳諧書新刻目錄

玉藻集	蕪村	一夜口授	麦水
新々式	蕉翁	落筆考	守化
凡乃實	一嵐	並指傳	蕉翁
生學之夜活	直生	二ツ竺	竹石
附夕十三典	一嵐 麦水	百題叢句集	直生
道如枝折	大魯	まうか稱	子安
小つち	いろは分 季上	住吉奉納津守弘初篇	

安永四乙未五月

京都書林

井筒屋庄兵衛

野田 治兵衛

安藤 八左衛門

大坂書林

石原 茂兵衛

